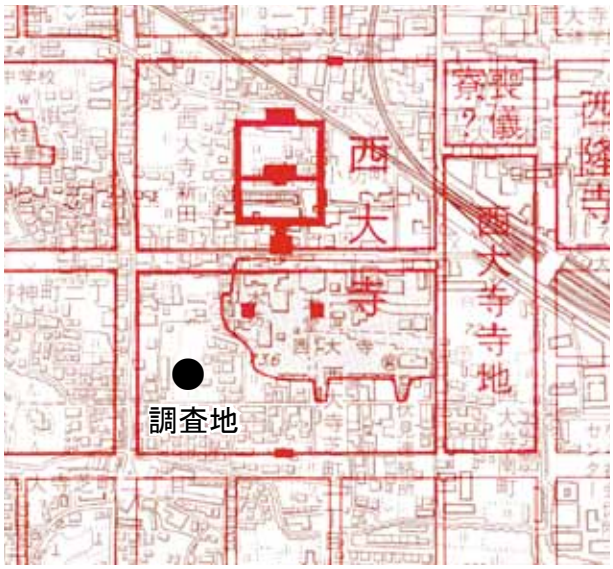
はるかイスラム世界からもたらされた壷

平城京跡（西大寺旧境内）奈良市西大寺新田町

平城京右京一条三・四坊に広大な境内をもった西大寺は孝謙上皇（のちの称徳天皇）の発願による寺です。西大寺旧境内第25次発掘調査では寺内を区画していたとみられる東西方向の溝（幅約７m・深さ約1.5～２m）を長さ約30 m分検出しました。この溝は『西大寺資財流記帳』の記述から復原される西大寺寺内では十一面堂院と西南角院の間に位置し、寺内の通路の側溝と考えられます。この溝は中央部を幅2.5～3.7 m、深さ0.9～1.5 mほど一段深く掘られており、溝の底には厚さ0.4 mの木くず層が堆積していました。

この木くず層内から８世紀後半の土器類、西大寺所用の軒瓦、「神護景雲（じんごけいうん）二年（768年）」の年紀がある木簡などとともに当時の西アジアにあったイスラム帝国（アッバース朝）で作られたイスラム陶器の破片が出土しました。平城京初の出土で、明確な時期がわかるイスラム陶器として貴重であり、我が国最古のイスラム陶器出土例になります。



発掘調査地点

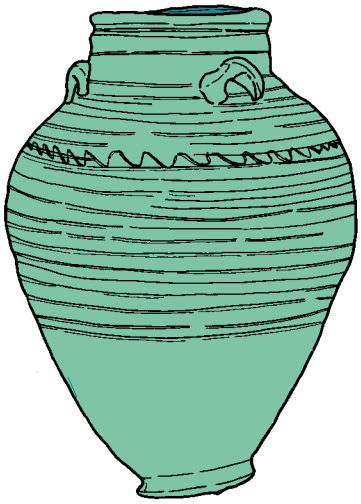
出土したイスラム陶器（左）と「神護景雲二年三月五日」の年紀がある木簡（右）

検出された東西方向の溝(西から)

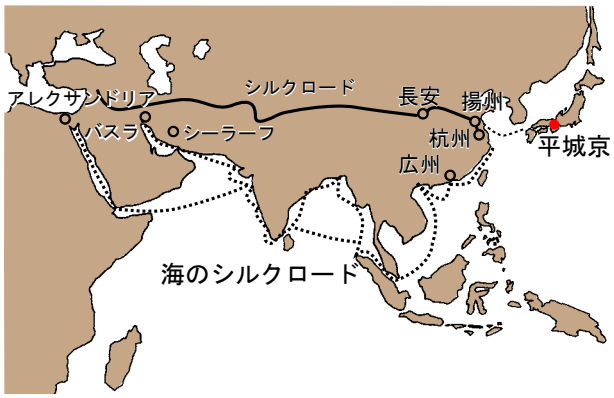
イスラム陶器・木簡などが出土した木くず層（東から）

出土したイスラム陶器は内外面に青緑色（内面は黒緑色に発色）の釉薬を厚く施しているのが特徴です。こうした釉薬はビザンチンやペルシャ陶器から受け継いだもので､アルカリ釉（ソーダ釉）と呼ばれる中東地域独特の釉薬です。肩部から底部の破片が出土しており、肩部には波状の文様が一条めぐります。高さ 50 センチ以上の壷の破片とみられます。

こうしたイスラム陶器は、これまでに東南アジアや中国の沿岸部の港湾都市遺跡、日本では 9 ～ 10 世紀のものが、九州の大宰府跡(だざいふあと)や外交施設である鴻臚館跡(こうろかんあと)などから出土しており、はるかインド洋、東南アジア、中国を経て、海上交易路を通じ平城京にもたらされたものと考えられます。ただ、焼き物の質は軟質で、中国陶磁などと比べると耐久性では品質が高いとは言えません。当時の西アジアでは一般的な生活用品であることからも高級陶器として容器だけが輸出されたとは考えにくく、我が国で容易に入手できない西アジアの珍しい産物の容器であったとみられます。中に入っていたのは乳香･ローズウォーター(バラ水)･デーツ（ナツメヤシの実)･シナモン（肉桂)･砂糖･･･さまざまに考えられます。あるいは、西アジアでは普通の壷でも、奈良時代の日本では、いかにも異国の雰囲気をかもしだす青緑色の壷自体が珍しく、入れ物の壷も貴重視されたかも知れません。アラビアやペルシャなどイスラム商人の手によって、はるか一万数千キロの海路をへて中国にやってきた壷を我が国にもちこんだのは遣唐使(けんとうし)なのか、東アジアの海上交易で活躍した新羅(しらぎ)の商人なのか。都の大寺、西大寺にもたらされた理由は何か。想像はふくらみます。この青緑色の陶器の破片は、８世紀後半の海路を通じた活発な東西交易を示す重要な資料であり、当時のこうした国際的な交易ネットワークに日本も加わっていたことを示す貴重な資料だと言えます。



出土したイスラム陶器の復原イメージ



８世紀の東西交易路